

令和3年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－7号)

農林総合研究センター
令和3年7月8日調査

気象経過

< 平年対比 >

【平均気温】

- ・ 6月第6半旬は、金沢は高く、輪島は並 (平年差：金沢+0.5℃、輪島+0.3℃)
- ・ 7月第1半旬は、金沢、輪島ともかなり高い (平年差：金沢+1.6℃、輪島+1.5℃)

【日照時間】

- ・ 6月第6半旬は、金沢はかなり多く、輪島は並 (平年比：金沢 134%、輪島 110%)
- ・ 7月第1半旬は、金沢、輪島ともに並 (平年比：金沢 111%、輪島 104%)

【降水量】

- ・ 6月第6半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない (平年比：金沢 39%、輪島 18%)
- ・ 7月第1半旬は、金沢はやや多く、輪島はやや少ない (平年比：金沢 126%、輪島 61%)

【1ヶ月予報】

7月1日発表の1ヶ月予報(7月3日～8月2日)では、期間の前半は前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1ヶ月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込み。

向こう1ヶ月の平均気温は、平年並か高い確率40%です。週別の気温は、1～2週目は、平年並か高い確率40%です。3～4週目は、平年並の確率40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 出穂期予想

ゆめみづほは、加賀地域では平年に比べ1～2日程度早く、前年に比べ1～2日程度遅い。能登地域では平年に比べ5日程度早く、前年並。

コシヒカリは、加賀地域では平年に比べ3日程度早い～平年並で前年並。能登地域では平年に比べ2～4日程度早く、前年に比べ1～2日程度遅い。

【品種別地域別出穂期予想】

ゆめみづほ	加賀：7月16日～7月20日	平年に比べ1～2日程度早い
	能登：7月21日頃	近年より2日程度早い

能登ひかり	能登：7月20日～24日	近年に比べ1日程度早い
-------	--------------	-------------

コシヒカリ	加賀：7月27日～7月31日	平年より3日程度早い～平年並
	能登：7月30日～8月4日	平年に比べ2～4日程度早い

2. 葉齢

ひやくまん穀は近年比±0.0葉(加賀地域：-0.2葉、能登地域：+0.1葉)となっており、葉齢展開から見た生育の遅速は、加賀地域では近年に比べ1～2日程度遅く、能登地域では1日程度早いと見込まれる。

3. 草丈

ゆめみづほは平年比104%(加賀地域：103%、能登地域：107%)で平年～やや長い。

コシヒカリは平年比99%(加賀地域：97%、能登地域102%)と平年並。

ひやくまん穀は近年比99%(加賀地域：100%、能登地域98%)と平年並。

4. 茎数

ゆめみづほは、平年比109%(加賀地域：111%、能登地域：106%)と加賀地域では平年よりやや多く、能登地域では平年並。

コシヒカリは、平年比101%(加賀地域：105%、能登地域94%)と平年並。

ひやくまん穀は、近年比108%(加賀地域：97%、能登地域：122%)と加賀地域では近年並、能登地域では近年より多い。

5. 葉色

コシヒカリは4.0で平年比-0.1（加賀地域±0.0、能登地域-0.1）となっている。

ひやくまん穀は4.4で近年比±0.0（加賀地域-0.2、能登地域±0.0）となっている。

m²当たり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	484本	（平年比 101%	前年比 106%）	27.2 本/株
	加賀	496本	（平年比 105%	前年比 113%）	27.9 本/株
	能登	466本	（平年比 94%	前年比 96%）	26.1 本/株
ゆめみづほ	県平均	575本	（平年比 109%	前年比 111%）	32.0 本/株
	加賀	584本	（平年比 111%	前年比 106%）	33.2 本/株
	能登	558本	（平年比 106%	前年比 123%）	30.6 本/株
能登ひかり	奥能登	442本	（近年比 88%	前年比 102%）	23.9 本/株
ひやくまん穀	県平均	528本	（近年比 108%	前年比 108%）	26.5 本/株
	加賀	466本	（近年比 97%	前年比 104%）	23.4 本/株
	能登	606本	（近年比 122%	前年比 112%）	30.3 本/株

【病害虫の発生状況】

1. 雑草地における斑点米カメムシ類の発生

(1) すくい取り調査による成虫数が6.1頭（平年値：6.9頭）で平年及び近年並みに多い。特に、大型で飛翔性のホソハリカメムシやクモヘリカメムシが多い。

（令和3年7月8日【病害虫発生予察 注意報第1号】）

2. いもち病が7月6日（平年値：7月2日）に初確認されている。

3. 紋枯病が7月2日（平年値：6月30日）に初確認されている。

当面の対策

1. 分施肥系ゆめみづほの穂肥：2回目の穂肥施用は葉耳間長±0cm（出穂10日前）とし、施肥基準量を守り、遅くとも葉耳間長+2～3cm（出穂7日前）までに終える。

2. 早生品種は7月16日以降から順次出穂期となる。出穂期以降は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による飽水管理を刈り取り直前まで行う。

なお、強風やフェーンが予想される場合は、あらかじめ入水し、稲体の活力低下を防止する。

3. 普通期コシヒカリは幼穂形成期となっている。中干しを終了し、早生品種同様、間断通水による飽水管理とする。既に下位節間が伸長しており、下葉が枯れ上がると株支持力が低下して倒伏を助長するため、飽水管理を徹底する。

晩植コシヒカリ（5月20日以降田植え）及びひやくまん穀については、7月15日頃を目安に中干しを終了し、その後は間断通水による飽水管理を行う。

4. コシヒカリの穂肥

(1) 分施肥系コシヒカリの穂肥

① 1回目の穂肥施用は、幼穂長15mm（出穂15～16日前）、葉色板値3.5を確認して、遅れずに施用する。

② ただし、草丈が長く葉色が濃いほ場や茎数が多いほ場では、施用時期を遅らせた減肥することにより倒伏を防止する。

③ 2回目の穂肥は、登熟向上のため確実に施用する。

(2) 全量基肥体系コシヒカリへの穂肥分の上乗せ施用

① 地区の基準に基づいて施用する。

5. ひやくまん穀の穂肥

(1) 分施肥系

① 1回目の穂肥施用は、幼穂長2mm（出穂20日前）、葉色板値4.0を確認して、遅れずに施用する。

- ② ただし、草丈が長く葉色が濃いほ場や茎数が多いほ場では、施用時期を遅らせてたり減肥することにより籾数過剰を防止する。
- ③ 2回目の穂肥は、登熟向上のため確実に施用する。

(2) 基肥一発体系のひやくまん穀への穂肥分の上乗せ施用

- ① 出穂2～3週間前の葉色（葉色板）を確認し、葉色が4以下の場合には出穂7～10日前に窒素成分で10a当たり2kgを施用する。

7. 病虫害防除

(1) いもち病

- ① 常発地や葉色の濃いほ場、予防粒剤を施用していない圃場、川の近くや谷など霧が発生しやすい地区の巡回調査を強化する。
- ② 葉いもちの発生を認めたら周辺ほ場を含めて直ちに防除を実施する。また、葉いもち発生の有無に関わらず、出穂前後の穂いもち防除を徹底する。

(2) 紋枯病

- ① 発生が確認されており、常発地や前年発生ほ場、茎数の多いほ場では発生に注意し、防除を徹底する。
- ② 薬剤によって散布適期が異なるので、使用薬剤の基準に従う。

(3) 稲こうじ病の防除については、出穂前15～10日に実施すること。特に、常発地や前年発生ほ場では、薬剤散布適期を逸さないよう防除を徹底する。

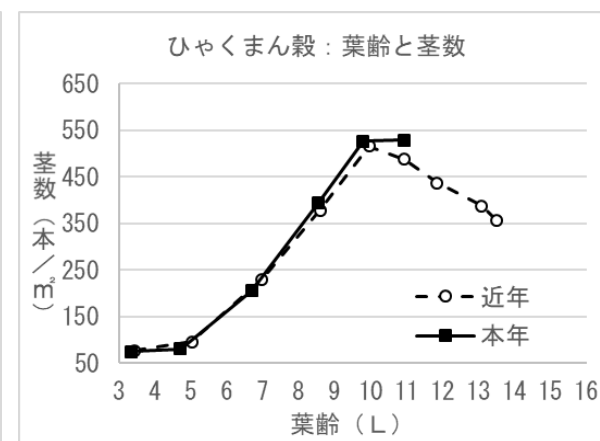
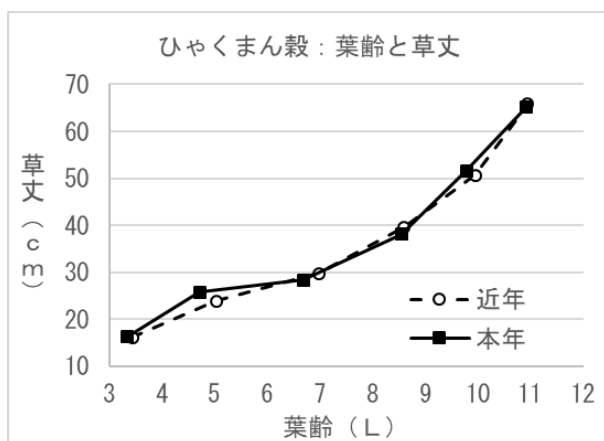
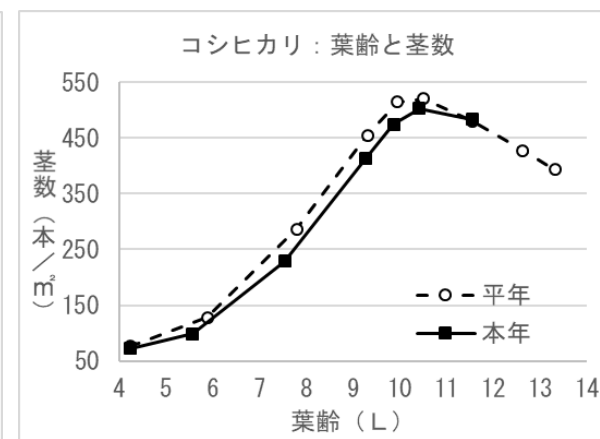
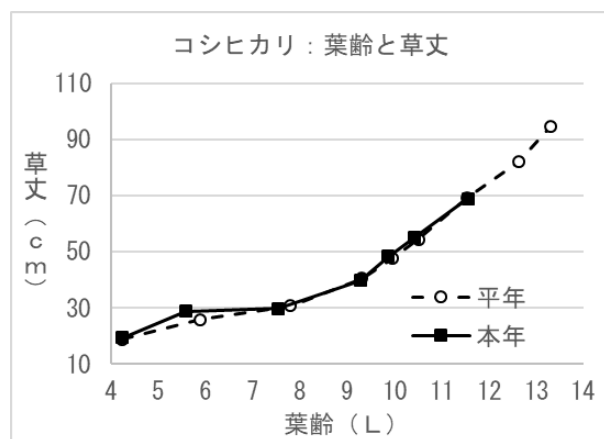
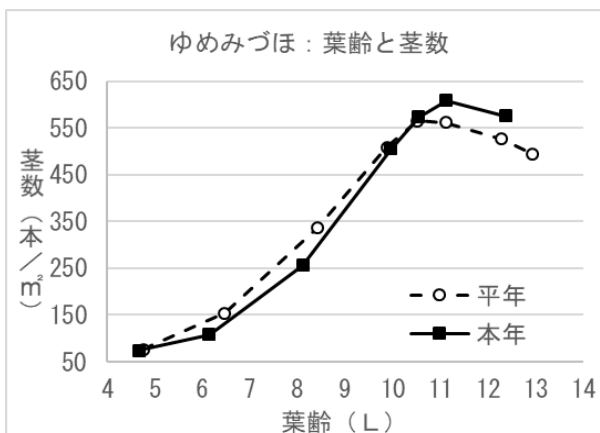
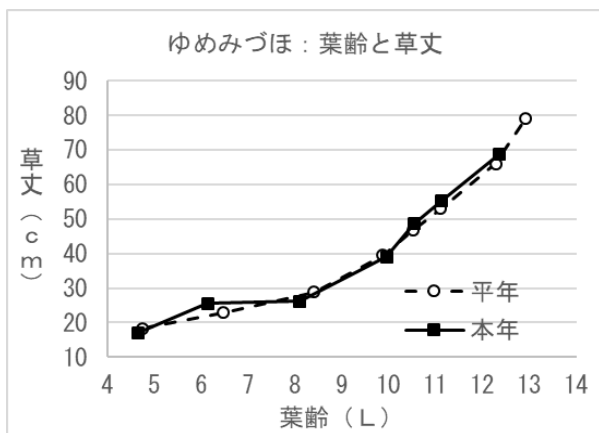
(4) 斑点米カメムシ類

- ① 今後の畦畔や農道の除草はカメムシ類の本田侵入を助長するので、やむを得ず除草をする場合は、本田防除の直前に行う。
- ② 本田カメムシ防除：出穂後7～10日と14～17日の2回の防除を徹底する。

8. 今後の天候に注意し、いずれの品種も出穂期を確認し、成熟期を見極めて適期刈取に努める。品質低下を防止し、適期に刈取作業を終了できるように共同乾燥施設の稼働計画等の作成を行うこと。

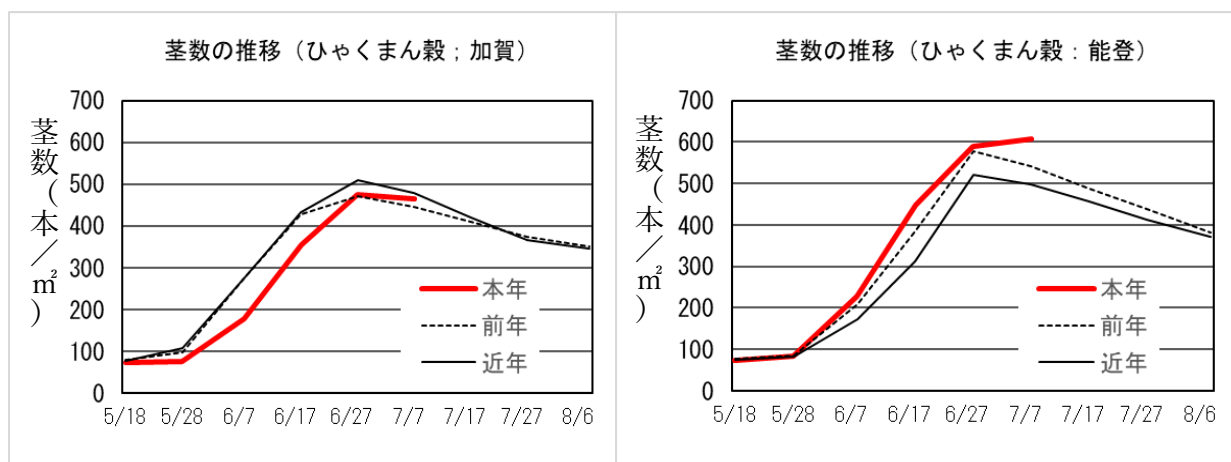
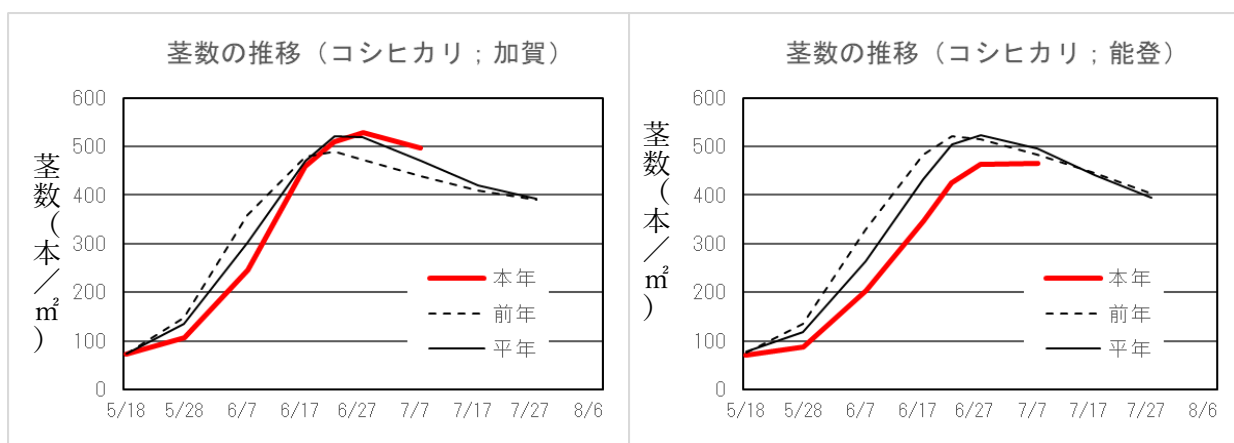
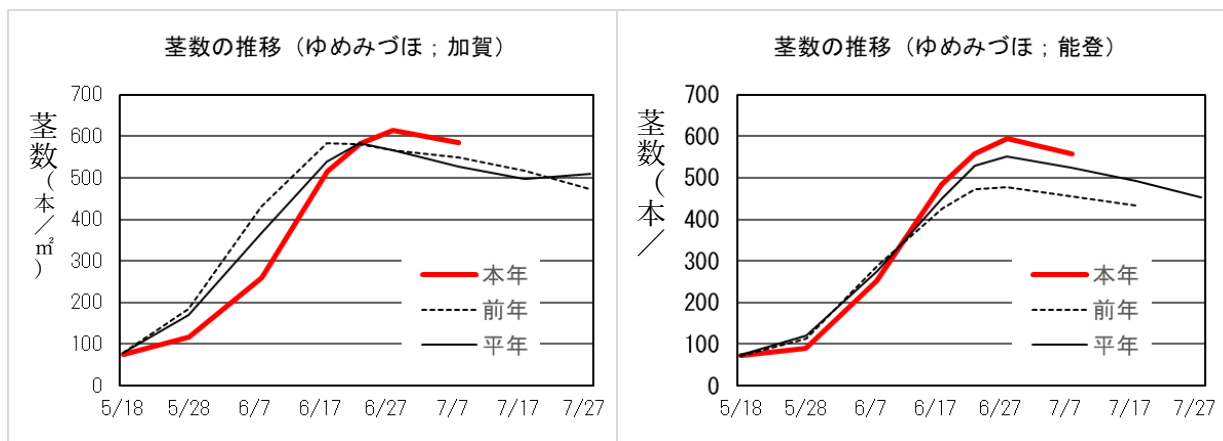
<参考：茎数の増加傾向>

・葉齢を基に茎数の増加を平年または近年と比較すると、ゆめみづほは遅発分げつの発生が多い傾向にあると予想される。コシヒカリ、ひやくまん穀は平年及び近年並となっている。

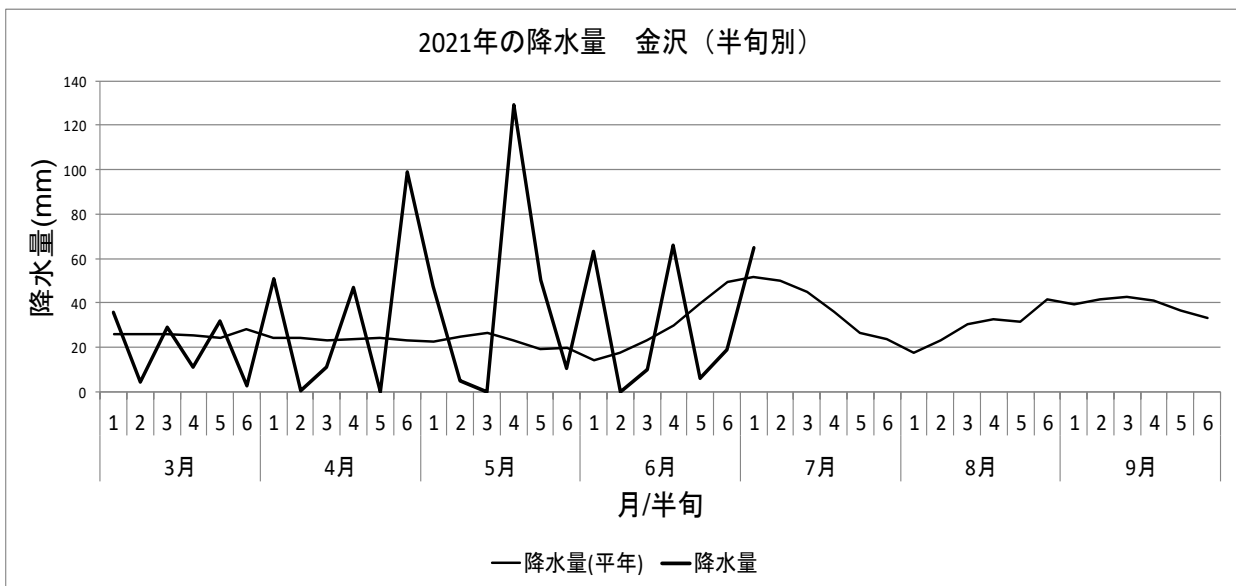
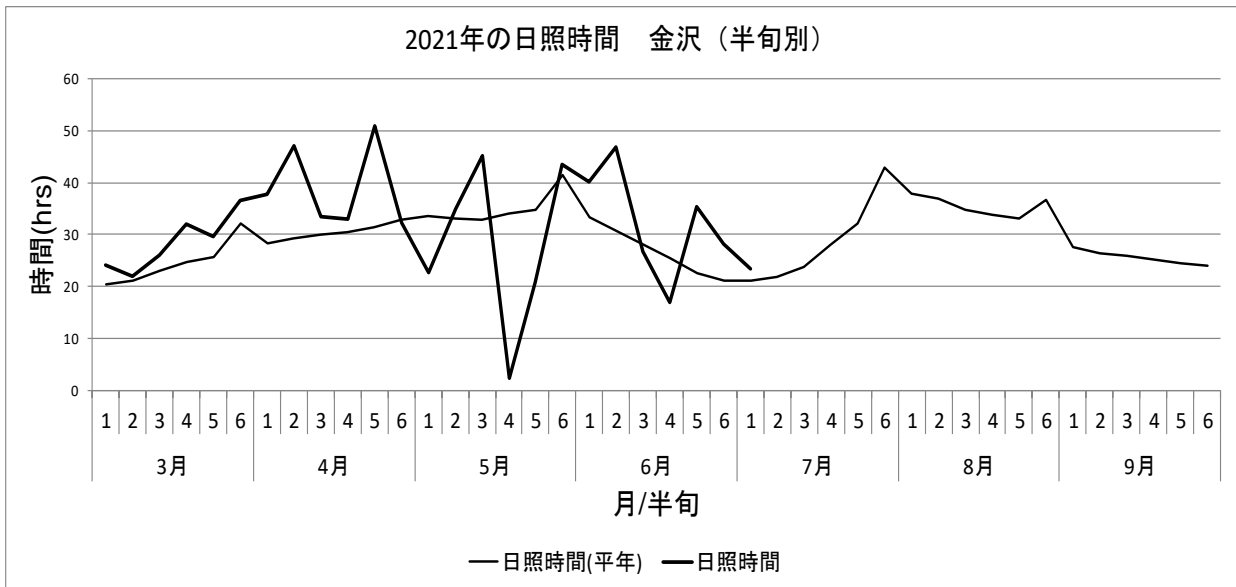
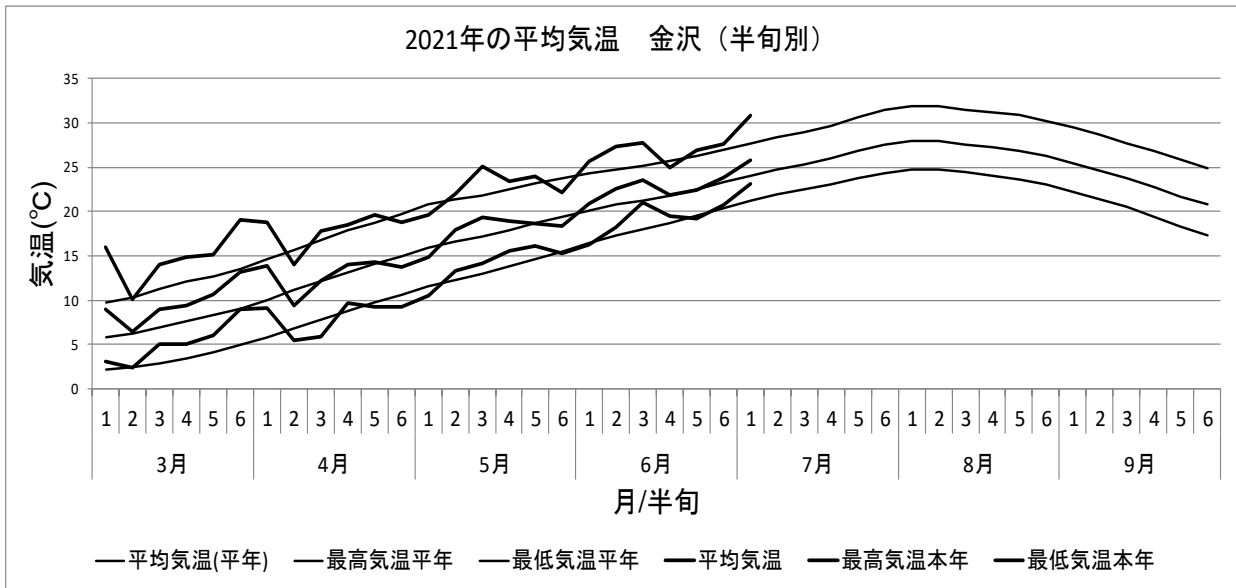


<参考：地域別茎数の推移>

- ゆめみづほの最高分げつ期は、加賀地域、能登地域いずれも6月28日頃となった。現在の茎数は、加賀・能登地域ともに平年及び前年に比べやや多い傾向。
- コシヒカリの最高分げつ期は、加賀地域、能登地域いずれも6月28日頃となった。現在の茎数は平年並及び前年並。
- ひやくまん穀の最高分げつ期は、加賀地域で6月28日頃、能登地域で7月8日頃となった。現在の茎数は、加賀地域で近年及び前年並、能登地域で近年及び前年に比べ多い。



気象経過グラフ (金沢気象台)



気象経過グラフ (金沢気象台)

